

2023年3月19日（日）主日朝礼拝説教

『その時彼らは知らなかった』井上隆晶牧師
イザヤ50章4～9節、ヨハネ福音書19章1～16節

①【何も答えられない神】

今日は裁判を受けるイエス様について学びましょう。イエス様は捕らえられ、夜明けにピラトの官邸に連れて行かれました。ピラトはイエス様にいろんな事を質問しますが、罪を見い出せません。そこでイエス様を鞭で打たしました。兵士たちはイエス様に茨の冠をかぶせ、紫の服を着せて王様の格好をさせ、「ユダヤ人の王、万歳」と言って手で打ちました。ピラトは無力なイエス様の姿をユダヤ人たちに見せれば、訴えを引き下げようと思ひ、イエス様を彼らの前に引き出します。

「イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出てこられた。ピラトは『見よ、この男だ』と言った。」(5節) 今日の週報の表紙の絵です。すると祭司長たちは「十字架につけろ。十字架につけろ」(6節)と叫びました。ピラトはイエス様に「何の罪も見い出せない」(4、6節)のに、祭司長たちがどうしてそんなにイエス様を憎み、恐れるのか分かりません。皆さんはわかりますか？答えは、イエス様が何の罪もないからです。祭司長たちは唯一正しく清いイエス様が現れることによって、自分の偽りが顕わになることを恐れたのです。「恐れ」はエデンでアダムが罪を犯した時に最初に現れた症状です。彼らは裸である事、つまり自分が弱く、貧しい者であることを恐れて、いちじくの葉で腰を覆いました。それ以来、人間はいろんなもので自分を飾り、覆っています。祭司長は宗教的な正しきで覆い、律法学者たちは知識で覆いました。飾りは本当の自分を隠すことです。真実な神の前では、真実な姿で立たなければなりません。

ユダヤ人たちはピラトにいいました。「律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」(7節) ピラトはこの言葉を聞いてますます恐れ、再び総督官邸の中に入って「お前はどこから来たのか」(9節)とイエス様に尋ねます。出身地を尋ねたわけではありません。お前は本当に神の子なのか？天から来た者なのか？という問です。ピラトは宗教に関わることを避けて生きてきましたが、突然、彼の人生の中に神が入って来たのです。彼は答えを出さなければならなくなりました。しかしイエス様は何も答えられません。旧約聖書の中にも「彼は口を開かなかった。」(イザヤ53:7)、「私は顔を硬い石のようにする」(同50:7)と預言されています。「私に答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、この私にあることを知らないのか。」(10節) ピラトは焦っているように感じます。自分は権限を持っているのだから答えよ、と命じますが、イエス様は「神から与えられていなければ、私に対して何の権限もないはずだ。」(11節)と言われます。答えるのは神ではなく人間の方です。私たちはこの方を正しく告白し、扱わなければなりません。

②【偶像崇拜の罪が露わになった】

この場面には「皇帝」という言葉が3回（12、15節）、「王」という言葉が4回出てきます。ピラトは何とかしてキリストを釈放しようとしたのですが、群衆は叫びます。「もしこの男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」（12節）群衆は「イエスという王か、ローマ皇帝かどちらかを選べ！」とピラトに迫ります。イエス様を釈放すれば、ユダヤ人から皇帝に訴えられ、自分の地位が危うくなります。さりとてイエス様（真理）の敵となることも怖いのです。彼はいつも顔色を伺って生きています。ピラトは何と弱いのでしょうか。人はこの世と神の国の両方を手に入れることはできないのです。二人の王に仕えることもできません。ここで裁判にかけられているのはイエス様ではなくて、実はピラトであったことがはっきりしました。その後ユダヤ人たちは「私たちに皇帝のほかには王はありません。」（15節）と答えます。イエス様のことを神を冒瀆する罪で訴えた彼らが、神を王とせず、皇帝を王と告白しました。ここで彼らの本性がついに顕わになりました。つまり彼らが偶像崇拝者であることが暴露されたのです。彼らは自分の思い通りになってくれる神（偶像）を求めていたのです。

ここまで話してきて、キリストの光の前で祭司長、ピラト、ユダヤ人たちの飾りが次々と剥がされ、偽りの姿が露わになったことがお分かりになるでしょう。そして聖書は「彼らとはあなたなのだ！」と言っているのです。権威があるようで権威がなく、神を求めているようで実は自分の願望をかなえてくれる偶像を追いかけ、清さを装っていますが汚れており、強そうに見えますが、本当の自分が露わになるのを恐れ、偽りで自分を飾って生きています。だからこれは最後の審判の先取りです。しかしこれは私たちを救うための裁きです。必ず嘘、偽りは剥がされるからです。

③【本当の自分、病める自分を認め、神の前に立つこと】

●義理の母が、「もう私は病気が治ったのだから、この薬は飲まなくて良い」と自分勝手に判断を下し、薬を半分捨ててしまいました。それを誰が笑うことができましょう。それと同じことを私たちはしているからです。罪というのは慣れるのです。罪を犯しても生きてゆけるので平気になります。さらに悪いことに健康だと錯覚するのです。すると薬も医者も必要ありません。

私たちは自分の罪が分かっているのでしょうか。自分の力でまだ何とかなる、自分でまだ操作できると思っていないのでしょうか。十字架の前で祈っていないから思い込むのです。レントになり、十字架のキリストを目の前にして祈祷を続けていると、罪の習慣は自分ではどうにもできず、キリストによらない限り癒されないことが見えてくるのです。キリストの血が流されなければ、誰も赦されないのです。

●先日カルト宗教についての研修会に出ましたが、参加者の内、救出に関わっている先生

は僅かで、後のほとんどの先生方は初めてでした。講師の先生がカルト宗教についてお話し下さったのですが、それを聞いて「カルトは恐ろしい団体だ」というイメージを持ってしまい、説教でお話をなさる先生がおられたようです。そのお話を聞いて、元信者である方が苦しくなって連絡をされてきました。学ぶことはいい事ですが、やはり本当の体験がないと難しいと思いました。知識だけになると、自分は善であり、カルトは悪であるというレッテルを貼るのです。私の教会では、カルトからの救出活動や精神障がい者との取り組みをしています。世の人はカルトは怖い、精神障がい者は怖いというイメージを持っています。でも実際に本人と関わると、怖くないのです。むしろ彼らから教えられることの方が多いのです。カルトの人の方がクリスチャンより純粋で熱心で、良い人が多いのです。精神障がいを患う人の方が、神を本気で求め、必要としているのです。彼らと関わることで、私はクリスチャンという飾りが剥がされました。世の中には100%悪という存在はありません。神は悪を造りませんでした。悪は存在ではなく、善の欠如の状態です。カルトの中にも善があります。悪魔でさえ神を信じているのです。彼らはキリスト教徒以上にすばらしいものがあります。やっていることはキリスト教徒以上です。ただ一つ違うのはメシアです。キリストが違うのです。だからせつかくの良い行いが実を結ばないのです。

●榎本保郎牧師がこんなことを書いていました。「教会は井戸のようなもので、水を汲み出すと、空になるような井戸はだめであって、良い井戸はいくら使っても、いつも同じ水位を保っているものである。そしてどんどん汲み出している井戸の水は生きており、そうでない井戸の水は腐り死んでいると言える。同じように、一生懸命祈ったり、み言葉を伝えたりしたからといって、その教会が栄えあふれることはない。のんびんだらりと楽しくやっても、それで別に変わったことはない。」

面白いことを言うと思いました。一生懸命祈り、話をし、人と関わっていても、そう人数が増えることはないのですが、中身が違うのです。祈って、人と関わっている教会はいつも新鮮なのです。私は「**あなたがたが出かけて行って実を結び**」（ヨハネ 15 : 16）とイエス様が言われた言葉を思い出しました。

●「自分から出ていけば、誰に会うのか？」と尋ねると、修道者フェオフアンはすぐに答えました。神と隣人に会うのだ。

机の上で勉強しているだけで、苦しむ人と関わり、交わらなければ、その人の信仰は傲慢になり、飾りの信仰になります。謙虚な人は、誰にでも学びます。たとえそれがカルト宗教の人からでも、です。出会うからこそ学び、変わるのです。人生とは自分の飾りが剥がされる場です。

キリストの十字架の前に立ち、祈り続けましょう。み言葉の前に立ち続けましょう。出かけて行って人と関わり続けましょう。そうすれば飾りが剥がされて、自分を知ることができます。そしてそんな自分を愛し、癒す神に出会うでしょう。患者が医者の前に自分の裸を見せるように、恐れず、信頼して言うのです。「主よ、私は罪を犯しました。それを認めます。自分では癒せません。あなたのなさり方をもって癒して下さい」と祈りましょう。